よし！わがまち（西和賀町？！）を楽もうか！

ということで、事務局の広報責任者石垣が、横手出身のカミさんをもつ特権（?）をいかして、時々訪れる西和賀町、会場となる銀河ホールの周辺を、観光案内とは少し違ったコアな観点から見所を紹介します。

錦秋湖

銀河ホールのロビーから見える錦秋（きんしゅう）湖は四季折々の変化が楽しめる。秋に人びとは、湖面に踊るように映る紅葉の美しさに目を奪われるかも知れない。

春。軒先まで届く雪に覆われた冬が終わり、それこそ、なにもかもがなのだが、桜前線などと浮かれているヒマもないほど、この地域の花は一斉に咲くのだ。待ちかねたように、マラソンの号令よろしく戸外に飛び出すこの季節に、私たちが生命体である限り、自然の息吹の楽しさを感じないわけにはいかないのである。タラの芽、コシアブラ、ミズ、ウルイ、アイコ、ワラビ、ゼンマイ。人びとの生活の恵みはすべて山から授けられる、かたく積もった雪をじっと耐えていたご褒美のように。

人気のスーパー

このあたりに、なんども山菜採りに出かけたことがある。5月の連休を過ぎれば、日中は暑くなって、肌を刺す虫も動き回る。朝早く出かけ、昼にはもうどこで

もいいから温泉に浸かるのが一番いい。500円玉を握りしめれば楽しめる公衆の温泉が、この辺りならどこにいても少し走れば見つかる。

和賀川に沿って北上する。川は両側に連なる山々のすそ野を彫刻刀でえぐり取ったような渓谷である。ほっとゆだの駅からすぐ、昔からひとびとの疲れた身体を癒し、都会の人びとの心を癒してきた湯元温泉がある。温泉街の中心あたりに、何とかというスーパーマーケットがあるが、それほど大きい地区ではないのに、魚をはじめ、品揃えが多彩で新鮮、なかなかのスーパーなのである。温泉の帰りはここで、買い物をすることをお勧めする。以前、韓国の劇団「馬山」の人たちを連れて行ったら大変喜ばれたことを昨日のように思い出す。

もっとも地元産物の買物は、ほっとゆだ駅前から国道に通じる道路沿いにある八百屋さんも魅力的である。秋は必ずといっていいほど立ち寄る。店先に並べられる季節の山菜やキノコがお土産には喜ばれた。9月・・・キノコはでているかなぁ。

沢　内

県道1号線は北上するに、山間を走り抜けて雫石の国道46号線に達する。小岩井牧場もすぐだ。「岩手＝小岩井」などという図式では岩手を楽しむことにならない。小岩井牧場もいいが、都会の人が軽井沢や清里高原に行ってソフトクリームを食べるようなもので演劇人には物足りないだろう。そこから一歩出ようとすれば西和賀町こそ格好の場所だ。この旧沢内村こそ、劇団銅鑼が上演をし、全国に感動を届けた「燃える雪」の舞台となった『寒村』なのである。今ではもう『寒村』などという印象はない。昭和の30年代、高度経済成長の時代に誰が過疎の村の「健康」を考えていたのか。今なら選挙があれば候補者は誰もが医療・福祉だと美辞麗句をマイクにむかって叫ぶが、本当に必要なところに手が届いている

のだろうか。もう一度台本を読んでみたい気がする。

沢内バーデン

1号線から和賀川の渓谷を反対側に渡り、沢内バーデンを目指す。この温泉は気に入っている。雰囲気が実にいい。以前、宮城県で大きな地震があったときもここの露天風呂に入っていた。ただ湯面が揺れていただけなのかも知れないが、「湯面を地震波が伝わっていた、私はその波を見た」などと、だんだん曖昧な記憶が臨場感たっぷりに変わっていく。記憶というのは恐ろしいものだ。

少し酔ったおじさんが話す言葉は、横手の言葉と同じようだ。地元の言葉を聞きながら湯に浸かる。こんな贅沢はない。風呂から上がれば、テレビを消したくなるような、実にひとに柔らかな言葉である。テレビの言葉、言葉だけじゃないのかも知れないが、こんなにもとげとげしかったのかと発見するいい機会なのだ。

謎の湖面ステージ

谷川の氷がゆるみ、畑の雪がとけ。錦秋湖にたっぷり流れ込んだ雪解け水も、6月も過ぎようとすると水面が下がり、周辺の山々も、裾野を気にしなくてもよくなる。

この時期、銀河ホールのロビーから眺めると眼下に、忽然とステージが現れている。まだ水面下にあった名残か、ステージの表面に土が残っている。5年ぐらい前に作られたのだそうだが、これは利用しない訳にはいかない。交流会のメイン会場に利用できるかも知れない。篝火をたいて、鬼剣舞なんか踊っていただいたら、紙コップのビールでも極上の味に変身するだろう。

（つづく・・・かもしれない）